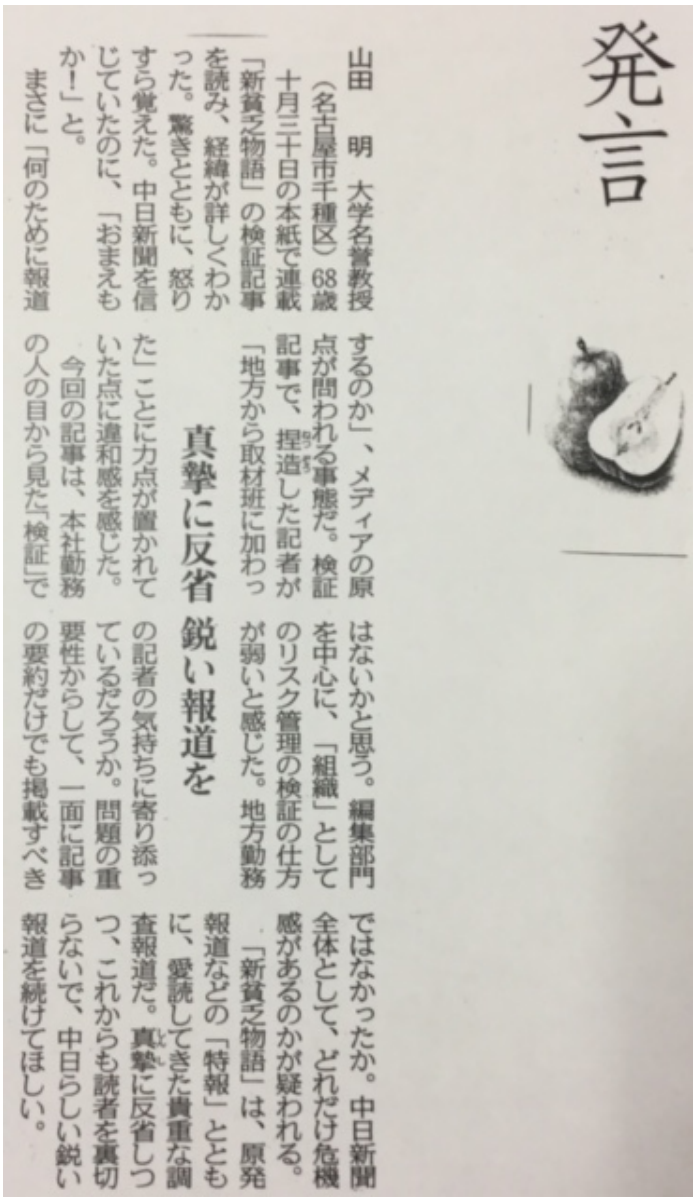
中日新聞へ「真摯に反省 鋭い報道を」

中日新聞 10 月 30 日朝刊から―中日新聞社は 19 日、連載「新貧乏物語第 4 部子どもたちの SOS」の記事や写真を一部削除し、12 日朝刊に「おわび」を掲載した問題で、外部委員 4 人を交えた「新聞報道のあり方委員会」を東京本社で開いた。本社の検証報告に対し、外部委員は取材対象者との向き合い方、連載の方法、編集局内の意識の見直しを求めた（写真は中日新聞サイト）。

新聞報道のあり方委員会で、外部委員の指摘を聞く本社側委員＝１９日午後、東京都千代田区の中日新聞東京本社で

この「検証」記事を何回も読んでみたが、どうも納得できなかった。それで掲載されることはないと思ったが、中日新聞の「発言」に投稿した。



発言

真摯に反省 鋭い報道を

山田　明　大学名誉教授（名古屋市千種区）68歳

十月三十日の本紙で連載「新貧乏物語」の検証記事を読み、経緯が詳しくわかった。驚きとともに、怒りすら覚えた。中日新聞を信じていたのに、「おまえもか！」と。

まさに「何のために報道するのか」、メディアの原点が問われる事態だ。検証記事で、捏造した記者が「地方から取材班に加わった」ことに力点が置かれていた点に違和感を感じた。

今回の記事は、本社勤務の人の目から見た「検証」ではないかと思う。編集部門を中心に、「組織」としてのリスク管理の検証の仕方が弱いと感じた。地方勤務の記者の気持ちに寄り添っているだろうか。問題の重要性からして、一面に記事の要約だけでも掲載すべきではなかったか。中日新聞全体として、どれだけ危機感があるのかが疑われる。

「新貧乏物語」は、原発報道などの「特報」とともに、愛読してきた貴重な調査報道だ。真摯に反省しつつ、これからも読者を裏切らないで、中日らしい鋭い報道を続けてほしい。

今回は「問題」の重要性からか、投稿した日に連絡があった。正直びっくりした。電話で私の「発言」の趣旨を確認するなどして、翌朝に掲載された。

私の言いたかったことは、この「発言」に尽きるが、あまり反響はなかった。2 年前の朝日新聞「騒動」のときほど、読者の関心もないようだ。

嬉しかったのは、私が尊敬するベテラン・ジャーナリストから、私の「発言」にまったく同感する、とメールをもらったことだ。とにかく、今回の不祥事を「真摯に反省して、鋭い報道」を期待したい。

（2016 年 11 月 16 日）